

ラベルワークと参画 高等学校での実践例

慶應義塾志木高等学校 中地譲治

はじめに

参画型の授業とラベルワークとは不可分の関係にある。生徒は、ともに学ぶ者と協調し対立しながら、何者かになろうとし、何者かになっていく。「かわる」はもともと「かふ」であり、「交ふ」と「変ふ」、すなわち「交換する」と「変わる」とことが同時に起こっている。ラベルワークは、その交換を促し、活性化させる技術としてある。ラベルを交換・贈与することによって、人は変容していく。さらに、「かわる」と共に、「つたえる」こともラベルワークで保証される。「つたへ」「つなぎ」「つらねる」作業の中で、「つく」機会が不意に訪れる。この「つ」音の連絡はきわめて重要である。人を真似し、人に教えられるのではなく、「思いつく」「気づく」という、きわめて主体的な経験が、人を何者かに変容させる。

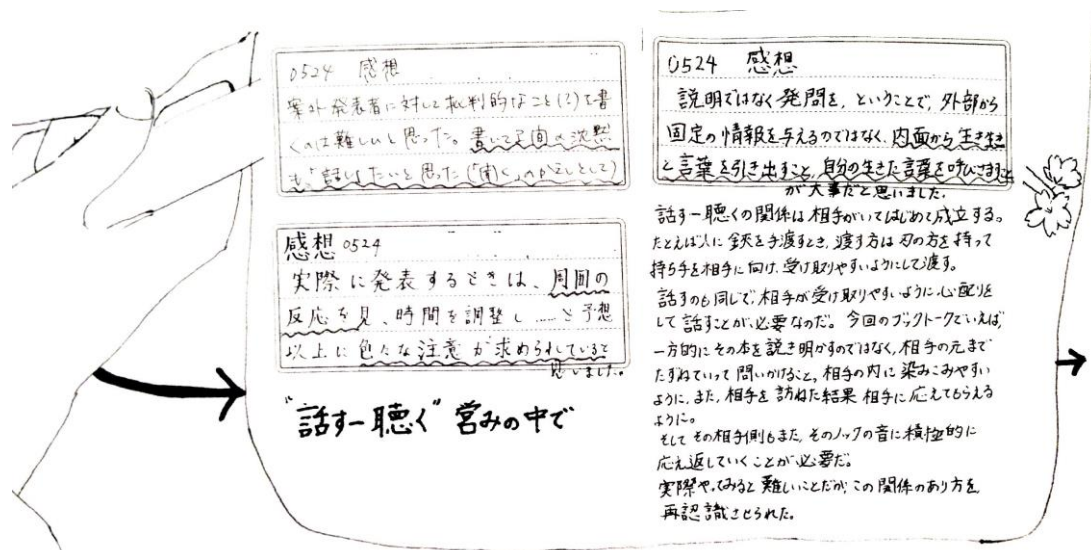
1. 参画と目指される「知」

C型学び

林義樹は、「気づき」のような暗黙知を「C型学び」として捉えている。その要点を以下にまとめておきたい。

人の学びの3原型

	A型：知識受容型 Knowledge Acceptance	B型：知識形成型 Knowledge Building	C型：知恵創出型 Wisdom Creation
何を	知識	認識	知恵
どうする	受容する 整理して蓄積する	対話・交流により獲得する 教えて学ぶ	創造する 芸術作品化する
評価法	客観的評価 相対的差別化	主観的評価 自己評価 相互評価 作品評価	体験 体感 認め合い 相互支援 絶対的個性化
評価の視点	記憶力 正確さ 早さ 量	個性 独自性 意義性	行動 共同性 人格
目指される力	記憶し再生する力	考えを伝える力	協同して生きる力
適合するパラダイム	工業化社会	情報化社会	知識社会



さらに林は、C型の知の獲得支援を次のように述べている。

知がまるでいきもののように自ら動いていく（もちろん現実には知がひとりで動くことはありえない）ように知の運動を支援・促進することである。このことを知の立体的な自己運動の支援と呼んでいる。¹

「気づく」ためには、言葉の自動性にたよる他はない。この自動性こそ「知の立体的な自己運動」なのである。教員は「知の立体的な自己運動」の支援者でなければならない。

それは例えば、上のラベル通信（国語科教育法の授業）が示すように、「話す」―「聞く」という営みを、授業において自然に成立させることなのである。国語以外の教科においても、言葉から離れられないのであるから、話すことと聞くことが授業における言語活動の根幹にある。

2. 言語活動と「参画」との親和性

学びの場と働く場、そして暮らしの場で用いる言葉を差別化しない

言語活動は教室で成り立つだけでなく、家庭でも、職場でも、あるいは旅行先でも、私たちは言葉を用いている限り、いつでもどこでも言語活動の渦中にある。教室での言語活動が目指していることは、言葉で正確に情報を伝えることができ、言葉で他者と心を通わせることができ、仲間としても言葉で信頼されるように、よき言葉の使い手になることを第一義としなければならない。学術論文を書くための客観的な知識と文章力や、国語ならば古今の文学作品を深く味わう鑑賞力や、読解のための文法力などの習得は大切だが、家庭や職場で使いこなせる言葉を身につけることはさらに大切だ。

グローバル企業であるI社の人事部長を招いて、I社の入社面接で、応募者の資質をどのような観点で判断しているのかというテーマでの講演会に参加したことがある。その部長は、応募者を適正に判断する時に、常識的には大切だと思われる英語力や、学校の成績などよりも、実はさらに大切な資質があると語った。それは8つの観点で示された。日本語訳の方は後日の拙訳である。

Embrace challenge 同僚の挑戦を勇気づけられる人

Collaboration globally 地域の枠を越えて協力できる人

Act with a systematic perspective 計画的な見通しで行動できる人

Build mutual trust 親密な信頼関係を築ける人

Influence through experience 経験で影響を与えられる人

Communicate for impact 実感を与えられる人

Partner for clients success お客様の成功のパートナーになれる人

Help other succeed 他者の成功の援助ができる人

グローバル企業の求める人材であっても、同僚性や人格力が評価されることを、あらためて知ることになった。教室で子どもたちにどのように成熟への指針を示せばよいかという大切なヒントが与えられた。

「参画」から見た言語活動の本質

そしてすぐに「参画」という言葉が、それも自然に思い浮かんだ。林義樹は「参画」を次のように定義している。

参画とは参加者が①その場の理念・目的・目標・方法を全員で共有しながら（共有性）、②その場の計画段階から実施・評価・伝承の段階に至るまで（累積性）、③自らその一翼をになって（責任性）、④その場に関心をもつ者すべてにチャンスを広げ（開放性）、⑤当事者・協力者の創意を結集した（創造性）知的生産行為。または、そのような、個人・集団・組織・社会の状態と定義できる。[「新訂 キーワードで拓く新しい特別活動」日本特別活動学会監修 東洋館出版社 2010]

教室は、家庭、職場、そして社会が構成する同心円に重なり合っている。この時、人々の話す言葉は同心円の中心から周縁に向かって放射状に拡大する。個人の言葉も、家庭での言葉も、教室での言葉も、職場での言葉も、そして社会での言葉も、言葉はその豊かさにおいてパロール（言語の個人的集団的な偏差の側面）の差異を超えて各場所を貫いてくれるのではないか、という言語活動の理想を、この定義は教えてくれている。それに導かれ、言語活動における「参画」のあり方を次のように記述してみたい。

言語活動における「参画」とは、①個人の言葉を普遍的な言葉にまで深めることによって「共有性」を高め、②そのプロセスを言語化・図解化して記録・作品化することによって「累積性」を高め、③そこで得られた言語的な成果を汎用する「責任性」を自覚し、④言葉を活性化するために「開放性」を確保して外部と交通し、⑤それらの成果として、新たに共有される言葉を生み出していくという「創造性」を発揮することである。

¹ 「知識社会の次世代型大学教育：ナレッジ・マネジメントと参画教育の視座から」
教育総合研究：日本教育大学院大学紀要 1, 21-40, 2008

- ①人の言葉を普遍的な言葉にまで深めることによって「共有性」を高める力こそ、言語活動の基底となる理念である。生徒はもちろん、教員も、そして教職課程に在籍する学生も、この理念を忘れては国語教育にかかわり合うことはできない。
- ②そのプロセスを言語化・図解化して記録・作品化することによって「累積性」を高める力は、国語教育では、その3領域である「話す・聞く、読む、書く」に通底する「表現」に相当する。特に、ラベルワークは「話す・聞く、読む、書く」すべてを作業として行う優れた言語的な技法である。さらに、図解や図考には視覚的な表現へ広がり、「見る」領域へと自然に展開し、メディアミックス環境における言語活動の変質にも、見事に対応する。
- ③そこで得られた言語的な成果を用いる「責任性」を自覚する力は、そもそも先行する世代からの贈与としてもたらされた言葉に対する返礼義務としての自覚がもとなる。受け取った言葉をさらによいものに洗練させて、次の世代に伝承していくという意志が責任感を生じさせる。
- ④言葉を活性化するために「開放性」を確保して外部と交通する力は、自言自语を他言語と交渉させて活性化し、表現の新生面を切り拓く。それと同時に、自言自语の交換可能性が飛躍的に高められて、翻訳に耐えうる強靱な言語構造がもたらされる。この言語的な交渉が、そのまま人格的な交渉に適用されることによって、所属集団の価値も自ずと高まっていく。参画の場にゲストやワーカーが訪れることで、その場はとて豊かになる。
- ⑤以上の成果として、新たな言葉を生み出していくという「創造性」を発揮する力こそ、「参画」のプロセスの最後に自ずともたらされる果実である。

3. ラベルワークによる「国語表現」授業の試み

書かれたものの行方

どの学校でも年度末には、生徒のレポートや論文を作品集にまとめた学内誌を発行することで、授業の成果報告をするのが通例のことと思われる。それを読んで初めて、友人の書いた論文の内容を知る者もいる。教室という時空を共有しながら、学習活動は個に解体され、教師と生徒との一対一の関係で指導が行われる。たとえばある生徒の書いた論文を添削し、その添削した原稿を印刷して、授業内に他の生徒全員に配布したとしても、もともとその論文を書いていない生徒にとって、それがどれほど意味のあることなのだろうか。自分の書いた文章が指導者によって添削されない限りは、学習者の充足感が生じないに違いない。その求めに応じたとしても、そこでは、教師と生徒との縦の関係は成り立つが、生徒は学び合っているという連帯感は遠くなり、生徒同士の横のつながりは切れている。

「書くこと」を現在時において行われる活動として捉えるならば、このような授業展開を行う以上、その成果は事後的にしか確認できないのである。作品集に「書かれた」ものを再読して、「書いていた」過去を思いだそうとしても、そこで想起されるのは未来に対して従属していた時空なのである。論文とは常に未来に向けて「書かれる」のであって、今ここという時空にある自己を、その時空から切り離し、未来に向けさせてしまう、あえて言えば未来に投げ捨てることになるのではないか。

今ここの活動を、目的と見なされる来たるべき何かへ手段にする。ここでの感覚は、教室での学びの理想と随分とかけ離れているように思われる。その違和感の克服のためには、教室での学習活動は、教育は将来への投資であるという経済原理と、どこかで訣別していなければならない。また、そのための理念と方法を、参画とラベルワークに求めたい。

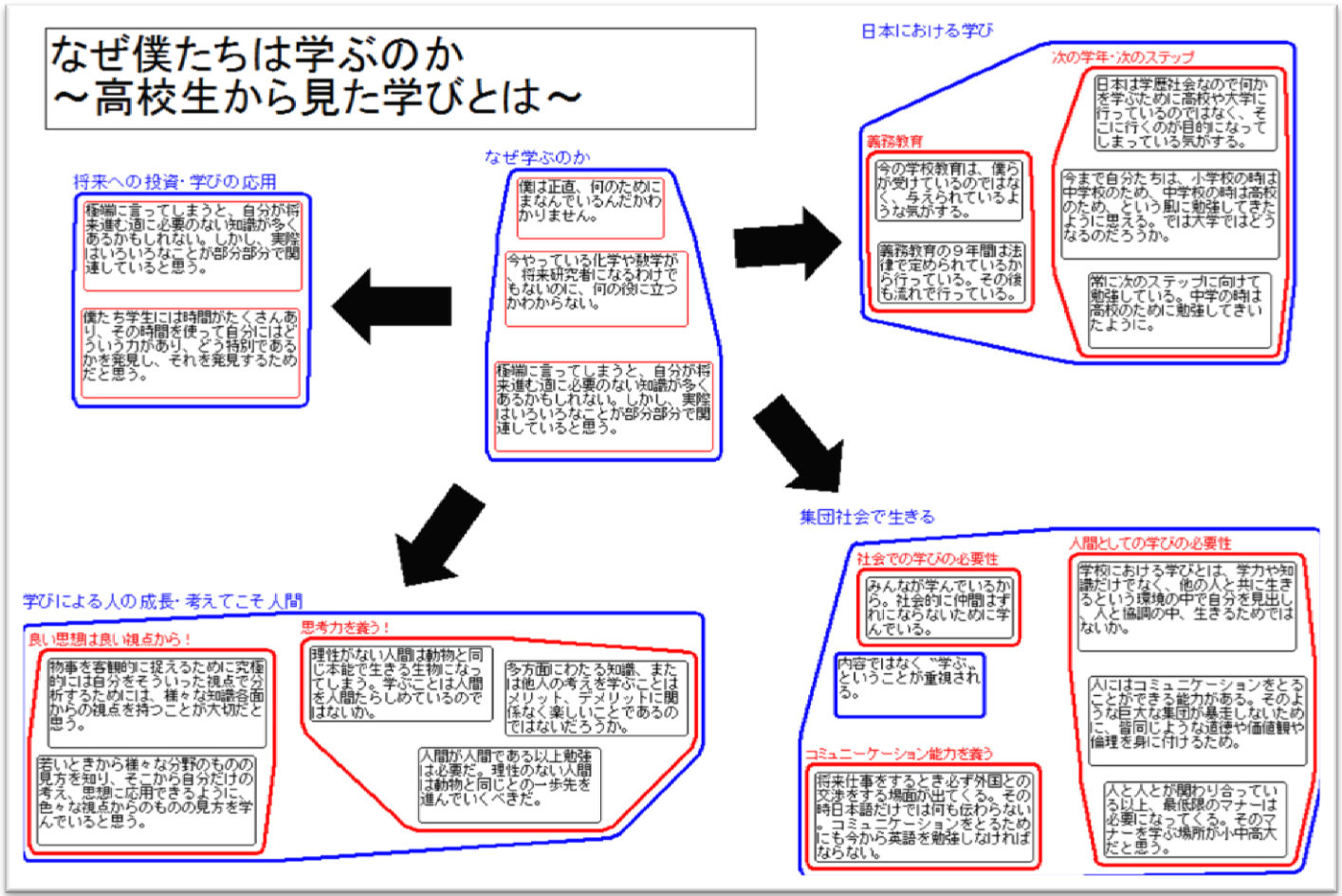
ラベルセッション

ラベルトークとラベル新聞づくりの一連のラベルワークを、授業では「ラベルセッション」と名づけた。セッションのあらましは以下の通りである。クラス全員21名を5人のグループ×3、6人のグループ×1に編成する。→一人10分の時間内で、自分の選んだ本のあらすじ、主要なテーマ、感想を、グループの他の人達に発表する。→発表の後で、各自が肯定的なラベルと批判的なラベルを一枚ずつ計2枚を感想ラベルとして書く。→それをもとにラベルトークを行う。それを順番に行っていく。→次回までの宿題として、発表者に渡された感想ラベルをもとにラベル新聞を作成する。→ラベル新聞を全員に印刷して配布する。→教員がラベル新聞をもとに、各グループでのセッションを講評する。

生徒達が初めてつくりあげたラベル新聞を参考資料として挙げた。

ラベル図考

「ラベル図考」作成のセッションは二日に分けて行った。制約を一つだけ設けることにした。それは、「自己言及的な問い」をテーマにすることである。



選ばれた。そのうちの一つを上を示す。

学びのプロセス図解から一自己言及的な問いへ (4人の生徒の感想から)

A君《私の「学ぶこと」への一つの答えは、最終的には、自分を様々な知識の鑑をもって映し出すため、というものである。最終的には自分、としたが、それは必ずしも自分のためだけでなく、何かしらの形で他の人にも関わってくる。自分の述べた考えや、自分のした行動、そういったものが自分ではない他人にも影響を及ぼすのである。逆に自分も他人からのそれらの影響を日々受け取っているはずなのだ。それをいかに自分のものにするか、自分の支配下に置くかが、学ぶことの第一歩だと思う。学びにおいて大切なことは、学びに対して貪欲であること、それに尽きると思う。そういった点で、私は今まであまりよくなかったように思える(ラベルを見直した限り)。だが、そのこと(=自分の学びを見ること)によって、学ぶということの本質に多少なりとも近づけたのではないかと思う。》

B君《半年間に、最近何かとテレビ・新聞で議論されている「死刑制度」「憲法9条」「普天間基地」「安楽死」問題について、クラスの人達と意見を交換し合い理解を深めていった。自分の意見を根拠をもって相手に伝えることは必ず役に立つだろう。そんなすばらしい経験ができる授業だった。》

C君《左は小説『海辺のカフカ』の一節である。作中で作者は、この詩が多くの人々の心をとらえた理由を、「恋人を想う歌詞を」「ありのままに」書いたため、「その無心さが人々の心を静かに、でもたしかに打」ったからだと述べている。人の支え合いが社会をつくり、この社会の集まりが国家をつくる。しかし今日若者は、自らを社会から切り離し、他人を傷つけ自分も傷つけるという過ちを繰り返している。今まさに私達は「世界の縁にいます」といえよう。このような状況に対して詩は言う。「海辺のカフカを見」ると。柵にとらわれがちな現在で大切なのは、「生を充実させたい」「人と人生を共有したい」といった素直な「ありのまま」の心なのではないだろうか。私はラベルセッションを通し、物事を様々な角度から見ることで、こうした原点に立ち帰るという意識こそが大事なのだとわかった。》

D君《「学びのプロセス」というテーマについて考える。学びとは何か。我々が学生である以上、それは勉学のことを指す、と考えてまず間違いないだろう。また、それは誰もが考えるであろう答えである。しかし、私はより広義的な解釈をした。人生における「学びのプロセス」という考えである。このラベルワークは一種の「学びのプロセス」そのものである。ただしここでいうそれは狭義的な意味でしかない。すなわちラベルワークは国語表現という授業の中でディスカッションの仕方や編集技術を学ぶためのプロセスである。それに対し広義的な意味でのプロセスとは、ラベル

ワークを通して修得した編集技術のことを指している。それらは人生において新しい物事（勉学に限らない）を学ぶ際に使用されるプロセスとして蓄積されていき、新たなプロセスの修得につながる。すなわち、わたしの考えるところのこの広義的な意味での「学びのプロセス」は、狭義的な意味を内包した形になっており、それが連続的に作用しながら拡大していく。つまり「学びのプロセス」とは、その場限りのことではなく、人生において必ず役立つ時が来る知の財産であり、人生は常に学びの連続から成り立っているということを示唆しているようなことから、私はこのラベルワークが単なる授業の一環、そのプロセスでしかないとは思わない。いずれその知識・技術が新たな「学びのプロセス」として機能するであろうと考えている。これが私の学びの結果である。》

4. リフレクション

全体の流れ図（実際）は次の通りである。顔を合わせるのも、ラベルを用いるのも初めての参加者の皆様の取り組みに、まず心から感謝申し上げます。参画的に場が成り立つ条件として肝心の「安全安心」が保たれ、また、試行錯誤が「創造的な錯誤」であるような場づくりができました。ご協力ありがとうございました。

時間	主題	参加者	筒井・長谷川・中地	ラベル名	実際と反省点
15:00	資料配付 クチコミタイム	ラベルも配布し、先ラベル①・②を書いておく。		①午前の部への感想 ②分科会への期待	4人掛けのテーブルに職種が重ならないように着席（名簿色分け）した。 ラベル記入の見本をホワイトボードに書いた。
5					
10					
15	オープニング		筒井		席の向きで見づらい人もいた。
20					
25	ラベルトーク	自己紹介を兼ねて①・②のラベルでラベルトーク			4人と5人のグループで、時間を同じにせざるを得ない。
30					
35					
40					
45	報告		長谷川		やはり話が長くなってしまい、5分ほどオーバーした。
50			中地		
55					
16:00					
5	ラベルセッション	ラベル記入③・④		③報告を聞いて(1) ④報告を聞いて(2)	「5分で書いてください」と説明が必要だった。
10		③・④でラベルトーク その感想をラベルに記入 ⑤・⑥ ※ラベル記入は両隣の人に限定		⑤Aさんへ(白を渡す) ⑥Bさんへ(白を渡す)	両隣の人に限定して書くという説明が複雑で、図を用意すべきだった。また、何色のラベルを渡すのかは、もっとはっきりと説明すべきだった。
15					
20					
25					
30	個人図解作成	①～⑧のラベルを利用して作成する。	各テーブルを回る	⑦Aさんから(白) ⑧Bさんから(白)	白ラベルを渡したので、個人図解には黄色をラベルを貼ることになり、各テーブルに糊の用意が必要だった。 島を作る、橋を架ける、島に名前をつけるなどの説明と図を載せた、ごく簡単な作成マニュアルを用意すべきだった。
35					
40					
45					
50					
55					
17:00	個人図解トーク	個人図解の相互評価			長谷川・中地からも最後にメッセージを伝えられた。各グループで1作品を選んで、すぐにカラーコピーして、出口付近に展示できればよかった。 リフレクションのため、赤ラベルを机上に残してもらった。
5					
10	クロージング		筒井		
15					

本分科会に参加していただいた方にお書きいただいた「ラベル」（私の報告への「感想ラベル」）をいくつか紹介しながら、疑問点に答えたい。

「かたち」にする・作品化する

生徒のコメントを集めてまとめ、一つの形にして、その生徒が何者か、誰が見ても分かる形で表現している点がいいと思います。

かたちの残すことの深い意味に気づかされました。かたちにすることのい

とおしさを感じます。

知恵を芸術作品化するという発想が新鮮で、ラベルワークがまさに個性あふれる作品になっている。

ラベルワークを通して人によって

様々な「かたち」となって表れる図解に驚き、かつどのように図解すると上手く表現できるかを考えさせたい。

ラベルワークの作品化という考え方に驚きました。作りこむという作業は楽しいものですね。

知恵を芸術作品化するワーク、素晴らしい！

言語活動の活性（アクティブ）化

インプットしたもの、調べたものをアウトプットすることの大切さ、生きる力を育てることにつながるがよくわかりました。

一つの作品として学びの経過をアウトプットすることができ、内容の定着に有効である。

ラベルの作成が「話す」「聴く」と同じという見方は意外な気がした。

マインドマップを作る要素作りだと把握。語句の原義の説明は面白い。

中地先生は言葉が巧みで、たくさんの魔法のことばをもっておられ、勉強になりました。ラベルの持つ意味がよくわかりました。

ラベルワークが本当に好きなことが伝わってきた。アクティブラーニングがおもしろそうで興味深い。

どのようなレベルの生徒にとっても言語活動として利用できる。自由度の高いアクティブラーニングである。

ことばの成り立ちから「話す」は身体行為の言語化で、アクティブラーニングの基本とわかった。

授業が楽しくなる

高校生でもここまでものができるのかと感じた。

学生が生き生きとしていた。高校の授業にも導入できるように感じた。

生徒が集中しているのが作品から伝わってきます。印象に残る授業であると思います。

表情豊かな人。実際に授業を受けてみたいと思った。ラベル図解には個性が表れますね。

とても時間をかけて仕上げた「ラベル図解」を見せていただき感心しました。男子でも好きな子はまるかもしれません。

生徒たちが生き生きと取り組んでいる様子にラベルワークの可能性を見たと。

スライドに写っている生徒さんの表情がすばらしく、発表する先生も楽しんで、見ていて私もワクワクでした。

どのように使えばよいか？

実際の高校の50分の授業でどう使うのかを、もう少し具体的に知りたかったが、文学作品一作を理解するにはぴったりか。

生徒さんの作品がすばらしいのはとてもよくわかったのだけれど、こちらが指導していく方法がいまひとつよくわからない。

授業内コミュニケーションツールとして一回的な授業に生かしながら、継続的・累積的な授業の総合化ツールとしてリフレクションに利用するという使い方が適している。

かかる時間について気になった。ラベル図解からレポート作成の道筋をもう少し知りたかった。

完成した一枚のラベル図解がすでに論文を俯瞰させるので、橋を架けた島（章立て）をめぐりながら、そのリアリティ（線条性）にしたがって論

文を書き進める。

国語での実践を見ながら、どうしたら数学に活かせるかと思い、これは難しいなと思いました。

「今日の授業で理解できたこと」というような表題で、授業の要点を書き、それをインデックスのようにして順序付け、授業＝学習分野を構造として把握しながら、学習した分野の感想を書き、一枚の図解にまとめる。何を学んでいたかの構造的な把握（リフレクション）を生徒自身が行えるような使い方がよい。

「ラベルワークはすばらしい」というプロモーションに聞こえる。「何故？」のしかけを知りたい。

自己関係における「話す」「聞く」という音声言語行為を「手放す」「受け取る」という身体行為として行いながら、同時に「書く」「読む」という文字言語行為として実現している。そこがラベルワークの総合的な言語活動のしかけなのだろう。

絵や文が上手くない場合は？

カタチはイノチってすごく重い。芸術センスがない私は、プレッシャーです。

絵心がある人がうらやましい！（難易度高い）

絵やイラストの巧拙を超えて、言語表現の限界を、非言語的な表現で補い、言葉だけでは伝えられないなにかを伝える、表現するということが実現できる。なので、上手くないほうが伝わる情報量が多い場合もある。

入試への対応は？

作品を作ることは大切だが、大学入試を控える生徒が行うことにどのような効果があるのか疑問が残る。

ペーパーテストだけではない入試の現状を踏まえると、ラベルワークによって得られる行為する力、言語以外で

伝える力、デノテーションよりもコノテーションが重視される場での表現力などの涵養には貢献できるのではないか。

漠然としたわからなさ

子どもたちの成長した姿や慶ぶ姿がわかったのですが、内容がよくわからなかった。

言葉的なものは少々苦手で、何とも言えないカンジです。作品づくりは面白

い。

答えという結果よりも、答えを導き出す過程を重視することがラベルワークには求められている。そこでは作業時間と作業場所の確保という難題にいつも直面することになる。しかし、完成した作品には時間と場所の記憶がオーラとして立ちのぼる。そこに価値を見いだせるかどうか、生徒と教員には問われている。

ラベルとは？

ラベルをこのサイズにした理由は？

三枚複写にした理由は？

人にわかりやすく、口頭で伝えられる概念（一文）は70～80字であることから、ラベルの大きさが決まっている。書きすぎてもいけないし、少なすぎても、主語―述語構造が不明確になって、概念足りえない。三枚複写である理由は、カーボン複写の限界が、おそらく3枚なのだろう。iPadなどでラベルワークが可能なソフトが開発される将来を期待したい。

おわりに

アクティブラーニングという言葉が教育現場で急速に普及している。ラベルワークは特に言語活動に寄与する方法としてある。アクティブラーニングそのものも、教員―生徒、生徒―生徒間の多方向的な言語活動の活性化を主な狙いとしているようにも見受けられる。両者の親和性は極めて高いと思う。しかも、ラベルワークはリフレクションを前提に、その方法、理念が組み立てられている。学び方を学んでいるというメタラーニングをも実現する。アクティブラーニングとメタラーニングとが一体となって、はじめて「学び」は自己組織化される。

「話す」「聞く」と「書く」「読む」とを言語活動として同時展開させていく技法が、ラベルワーク以外にあることを知らない。さらにそこには、「はなす」（離す・放す）「うける（きく）」というきわめてプリミティブな身体行為が前提されている。この物の贈与の原理に重なり合うことで、言語コミュニケーションも成り立っている。ラベルに書き、書いたことを話し、聞く人にラベルを手放し、聞く人はラベルを受け取り、そして読むという言語活動がラベルワークによって保障される。言語活動にとって、これ以上の安心安全はない。聞くことは尋ねることでもあり、それは訪れることでもある。自他の交流が自然に生起する。さらに、一人一人の書いたラベルは、その書いた者の人格の一部をなす。一枚のラベルは一人格であるとも言える。ラベルワークは単純な、簡単な原理で成り立っているが、だからこそ人類の言語活動の深さにまで結びつく。

最後になりましたが、この機会を与えてくださいました筒井洋一先生はじめ関係各位、ならびに分科会に参加なされた皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。